

部落共同体の

「崩壊と離散」の年代記

『田村孟全小説集』

田村孟著

文芸評論家 高澤秀次

A5判上製函入 702頁
航思社 7800円

本誌の読者にあえて喚起したいのは、その射程が戦前にまで遡る小説的時間の重層性と、風土の歴史的深層にまで下降することで照らし出される「細民」の背負うハンデについてである。

本書は、大島渚監督作品などの脚本家としても知られる田村孟が、一九七〇年代に書いた全小説集成である。七三年に青木八束のペンネームで、「蛇いちごの周囲」により「文藝界」新人賞を受賞、同時に芥川賞にもノミネートされた田村の小説の舞台は、日本の敗戦を濃厚に引きずった北関東の山間部の村にはぼ固定されている。

巻頭を飾る「細民小伝」にその作品意図が明確に示されているが、この作家が描き続けたのは、繁栄を謳歌する高度成長期前後にドロップアウトした人間たちの「敗北」の生態であり、そ

の年代記だった。

それが「蛇いちごの周囲」に始まり、「津和子淹留」、「鳶の別れ」と続く「津和子」をヒロインとする連作では、戦争未亡人の妹が戦死した義兄の故郷を訪ね、ちよつとした騒動を巻き起こすうちに、部落共同体にとっての、あるいは本家、分家の複雑な関係が介在するある「家」の「敗戦」の傷跡が浮き彫りにされてゆく。

別の言葉で表せば、田村が描いたのは「戦後に狂った」（『細民小伝』）人々の狂い様であり、「ひとつの家」の「崩壊と離散」（『鳶の別れ』）の姿だっ

た。田村の描く「細民」は、必ずしもストリートに被差別者を意味するわけではない。だがそこには、確かに「自転車のベルの工場」で「全部が全部、志木の部落の女衆」を雇ったことで、「差別だの偏見」の問題がさりげなく前景化されるのだし、「狼の眉毛をかざし」では、家から弾き出された馬喰と、村の有力者に「奴隷労働」を強いられる住み込みの織子の戦後が描かれている。

しかもここでは、大江健三郎的な「遅れてきた青年」の主題が、親の側

から描かれているのである。終戦により、右の分けあり夫婦の家に戦地から帰還した長男が、実は亭主の兄との間にできた子供だったという仕掛けも、田村が描こうとしたもう一つの戦後の一面を際立たせる。

一方、「いま桃源に」では農地解放の不徹底ぶりが、「ふんとの解放は山だ。山林原野つてもんを解放させてからに、開墾なり畜産なりに持って行かねばなんねえ」という言葉によって暴かれてゆく。これもまた田村孟の作品世界に特有の、「戦後解放」の恩恵に浴した勝ち組の背後から発せられる「細民」の声なのだ。

ここで、「山林原野の解放、山地主から開墾地をぶったくる、そういう景気をつけばえと思つて、おっぼじめた解放まつり」は、部落共同体の複雑な関係を露呈させつつ尻切れとんぼに終

わり、旅芸人を雇ってまで稽古を重ねた演芸会への期待も空しく潰える。

田村はそこで、演芸会をやるやらないで大もめにもめるのは、大半が雇いの炭焼きで暮らしていた、「貧しい地区」と他地区との生活格差問題が微妙に、だが決定的に影を落としていることを書き込むのを忘れない。

こうして見ると、田村孟が一九七〇年代に書き継いだ「純文学」作品が、大江健三郎の作品世界にも、また中上健次のそれにも通底していたことが分かる。一口に言えば、彼らが描こうとしたのは、共同体の「物語」の終焉を確認する、「小説」だったのである。

大江健三郎が、四国の森の谷間の村に拠点を定め、中上健次が紀伊半島の南端に近い被差別の「路地」世界を根拠地としたように、田村孟もまた北関東の山間部という周縁地域にある小宇

宙に固執し続けた。

ただ前二者と違い、そこは彼のルーツ（群馬県甘楽郡妙義町）に同定されるものの、作者自身は父親の転勤に伴い三歳でその地を離れ上京する。戦時中に疎開で帰郷し、そのまま高校卒業まで留まりはするが、よそ者の意識を払いきれなかつたに違いない。

田村の小説で「津和子」が、あくまで共同体の外部からやって来る。異人であつたのは、作家の故郷への距離感を象徴するものであつただろう。

それはこの作家が、脚本家に戻つた経緯と無関係ではない。大江、中上に匹敵するサーガ（物語群）を残せずに終わった田村孟は、だが一九七〇年代に残した作品の文学的可能性によって、未完の戦後文学史の隊列に加わる有資格者であることは間違いない。

たかざわしゅうじ